

2019年度 附属校国語科授業研究会<技の習得>

附属校教育研究・研修センター

11月2日(土)14:30~17:00、2019年度附属校国語科授業研究会<技の習得>を、**広島大学 副理事 教授 難波博孝先生**をお迎えし、朱雀キャンパスにて開催した。テーマは、「**教育改革への捉えと国語教育実践への提案—「思い」から出発して論理を活用する文学等の授業実践—**」であった。参加者は、長岡京2、宇治3、慶祥1、守山4人、小学校2、平安女学院1、教職大学院2、一貫1、計16人であった。

I 研究会の内容

(1) 『「論理の力」を育てる』シリーズの制作意図

このシリーズは、国語の授業の曖昧さを排し、「国語の力」を明確化して指導することを目指したものであった。日本の国語教育では、評論文において骨格である論理構造ではなく、衣装であるレトリックを教えている。難波先生はそのことにも問題意識を持ち、論理構造を教える手段を提案している。

(2) 共通テストについて

国語のプレテストと共通テストの趣旨を考える。マークもセンター試験とは変わっている。目的や場面に応じて文章を書くこと、言語活動を重視するのが趣旨である。それは教師と生徒の間答などといった形式で問題に具現化された。このような問題は、小中の全国共通学力テストと酷似しており、国立教育政策研究所と入試改革はつながっていることを示している。

記述問題では、実用的・論理的・その両方を組み合わせたものが出題される。文章の概要を把握し、解釈し、考えたことを端的に記述する能力を求めている。

大学入試センターは、共通試験だけではなく、各大学の個別入試も作ろうとしている。

この個別入試例を見ると、大学が何を求めているのかが分かる。例えば、「●●のはなぜか、○○を踏まえて説明せよ」と筆者の主張と根拠を問う問い方は、論理を捉え、本文を抜き出せば解ける問題だが、「筆者はどのようなことを言おうとしているのか」という問題では、本文の言葉を用いながらも、本文に書いていないことを答えるのだから、推論の力が求められる。本文に明確に書かれていない真相を推論しようと思えば、文脈を読む力、状況や場面を読む力が求められる。それを読んだうえで、解答を作る力は、文脈や状況を知らない人にも伝えなくてはいけない。つまり文脈を離れた人にも伝えないといけない。それはまず「脱文脈化」である。そして、回答の中でその文脈が伝わるように言うには、「再文脈化」が必要である。つまり、このような問題で求められるのは、まず本文に書いてあることを理解する力、つまり「文脈化」である。次に、文章を読んでいない人にもそれが伝わるように説明する力、つまり「脱文脈化」、最後にそれを定められた時数で文脈も含めて筆者の言おうとしていることを伝える力、つまり「再文脈化」、以上3つの力が求められている。

(3) 「言論の場」に参入すること

この3つの力は、あるコンテキスト、「言論の場」の存在と強い関連がある。例えば、論文を書くとき、その論文にはあて先がある。近い領域を研究している研究者に向けて、その研究群を一步前に進めるために書いている。何であれ、ある言表行為は、その言表を行ったものが、自分の意志で何かしらの「言論の場」に参画することである。しかし、教科書だけは、この「言論の場」つまり、言表行為のコンテキストが無視されている。例えば古典は数百年の隔たった時代の作品を、連続して読むこともあるのである。また挿絵も教科書の都合で反転されたり、絵本の表紙は削除されたり、暴力に「言論の場」が抹消される。しかし、文章を読むことは授業の1次からではなく、文章を読む前の0次から始まっている。芥川の「羅生門」は、実は昭和初期に書かれたという「言論の場」を無視して読むことはできない。昭和初期、どのような人々が芥川

の「羅生門」を読んだのか。それを学習者は0次で認識すべきであろう。これは「言論の場」への参入である。次に1次は学習者と作品との出会いである。それに有効なのは、朗読であると難波先生は考える。芦田恵之介の範読は着語で解説を入れながら読む方式で、有効である。学習者は、初見の文章で多くの言葉の意味を知らない。辞書を引かせたらいちいち理解が切れる。だから、着後で解説を入れながら、範読をする方法は作品との出会いで有効である。

指導要領の「現代の国語」で着目すべきは、文章の構成と論理を別のものとして指導しようとしていることである。論理は文章の骨格であり、構成は書き方全般文章の長短や句読点、レトリックをも含むので、別物なのである。

高階秀爾の『『間』の感覚』を例に考える。まず、論理の骨格をつかむ。段落番号を打つことは、文章の構成を捉えることであり、この文章の指導としてはあまり意味がない。書き手にとって、随筆は論理の骨格を、つまり主張をいかに隠すかというところが肝要であり、読者にとってはそれを捉えることが大事である。明治・大正時代の三読法は正しかった。直観、解釈、批評の三読である。一読目で主題は、主張は読者に捉えられる。直観である。それを確認するのが解釈。最後に筆者の文章を評価するのが批評である。

この文章の骨格は、日本文化の特殊性を主張することである。つまり、日本文化のすごさを提示することである。人と人、場所と場所、物と物との関係の持ち方の特殊性をこの文章は述べている。

この文章では、まず「水の東西」を読んで学習者を「言論の場」へ参入させ、範読で着後を交えながら学習者を『『間』の感覚』に出会わせ、直観で主題、主張を捉えさせ、その直観を解釈で確認し、最後にこの、日本文化論についての学習者自身の考察を創造させる。難波先生はこのような授業を構想する。

(4)「舞姫」の場合

難波先生は「舞姫」の授業で、語り手「豊太郎」が語っていないことに焦点をあてる。第三項理論である。「豊太郎」には何が見えておらず、また「豊太郎」は見えたもののうち、何を語っていないのか。「豊太郎」の語りの外に目を向けるべきである。語り手「豊太郎」の外に、「機能としての語り手」がいる。例えば、「豊太郎」は「エリス」の成長を全く語らないが、「エリス」の書簡からは、「エリス」の成長が読者には見える。そのことにより、読者は「豊太郎」が「エリス」の成長に気付いていないということを「機能としての語り手」から教えられる。「豊太郎」の語りの外に目を向けるとは、そういうことである。

《記録 立命館守山中学・高等学校 立命館大学教職大学院教職研究科M1 犬飼龍馬》

《編集 附属校教育研究・研修センター 今宿純男》